

ハリー・ポッターのイギリス（3）

——『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会のジェンダー観

坂 田 薫 子

はじめに

拙論「ハリー・ポッターのイギリス（1）」と「ハリー・ポッターのイギリス（2）」で紹介したように、2007年に『ハリー・ポッター』シリーズ¹⁾を完結させた後、J・K・ローリング（J. K. Rowling）が初めて大人向けの読み物として著した小説²⁾、『カジュアル・ベイカンシー——突然の空席』（*The Casual Vacancy*, 2012）の本カバーの後袖によると、全七巻からなる『ハリー・ポッター』シリーズは、2012年の時点で、「全世界で四億五千万冊以上を売り上げ、二百以上の国々、地域に流通し、七十三ヵ国語に翻訳され、映画は八本制作され、すべて大ヒットを記録している」世界的なベスト・セラーとなっている。

『ハリー・ポッター』がローリングの本国イギリスのみでなく、世界のあちこちで、子どもから大人まで、幅広い年齢層の人々に愛読され、世界的な社会現象となった背景には、これまでに時代や国を超えてベスト・セラーとなった他の児童文学、ファンタジー小説同様、多くの読者がこのシリーズに、子どもが大人へと成長するために直面する通過儀礼とその経験のもたらす葛藤、家族愛、人類愛など、国や地域、言語、性別、年齢を超えて、多くの人々が共有している感情や思想、問題意識を読み取っているからに違いない。ヴォルデモート（Lord Voldemort）にドイツ・ナチスのヒトラーとの類似を見出す読者がいたり、魔法省（Ministry of Magic）が次々と打ち出す政策の中に9・11以降の西欧諸国のテロ対策との類似を見出す読者がいたり、確かに、『ハリー・ポッター』シリーズには時代や国境を超えた世界の宗教問題、政治問題のもたらす影響の数々を読み取ることが可能である。

しかし、その一方で、物語の終盤、「第二次魔法大戦」（*The Second Wizarding War*、別名「hogwartsの戦い」（*The Battle of Hogwarts*））に集結するのはイギリスの魔法使いのみで、この小説が描いているのは国や地域を超えた広い世界というよりもむしろ、作者の本国イギリスという限られた世界であるということもまた否定できない事実である。ローリングが『ハリー・ポッター』シリーズに描き出そうとした世界とは、彼女の生きる現代イギリスという特定の社会でもあるのだ。

そこで、拙論「ハリー・ポッターのイギリス」では、世界的ベスト・セラー『ハリー・ポッター』シリーズに読み取ることのできる、現代のイギリス社会が抱える諸問題と、それらに対する作者ローリングの態度、回答について考察することを試みている。これまで「ハリー・ポッターの

イギリス(1)」と「ハリー・ポッターのイギリス(2)」では、主人公ハリー・ポッター (Harry Potter) が十代を生きる魔法界という仮想の世界に読み取ることのできる人種問題と階級問題、そして政治問題について分析し、作者ローリングの社会観について考察した。今回の論文「ハリー・ポッターのイギリス(3)」では、このシリーズで女性はどのように描かれているのか、そしてそこに作者ローリングのどのような女性観を読み取ることができるのかを考察してみることにする。ハリーたちの十代の生活を描くこのシリーズでは、彼らの学校生活の描写がその中心であるため、女性性の描かれ方について考察するためには、まずは成人した脇役の女性たちの描かれ方に注目してみるのが適当であろう。

1. 母性の理想化

成人女性の描かれ方に注意してこのシリーズを分析すると、「男は外で働き、女は家庭を守る」というステレオタイプ化された女性像が浮かび上がってくる。例えば、このシリーズの理想の家族像ウィーズリー (Weasley) 家でも、ウィーズリー氏 (Arthur Weasley) が働き、ウィーズリー夫人 (Molly Weasley) は家庭のやりくりをするだけで、外で仕事を持っているわけではない。ウィーズリー夫人は魔法使いでありながら、料理をし、洗濯をし、アイロンがけをする、と日々家事に追われている。魔法使いは非魔法族「マグル」(Muggle、魔力を持たない人間) に比べれば、魔法を使うことで手間を省いているように描かれている一方で³⁾、決してすべてが魔法で免除されるわけではなく、やはり家事を担当しているのは妻であるウィーズリー夫人である。彼女は家事という難儀な仕事を自分の代わりに引き受けてくれる召使い、ハウス・エルフ (house-elf) がいてくれたらどんなに助かるかと思わず愚痴を言ったり (『秘密の部屋』36)、「トリウィザード・トーナメント」(Triwizard Tournament) を観戦するためにホグワーツ魔法魔術学校 (Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry) を訪れた際、ホグワーツ滞在の間「料理をしなくていいなんて、なんて素敵気分転換かしら」(『炎のゴブレット』670-671) と本音を漏らしたりしている。

最終巻の『死の秘宝』で描かれる、結婚後のフルール・ドラクール (Fleur Delacour) も同様である。逃亡中のハリーたちを新居シェル・コテージ (Shell Cottage) に匿っているために仕事に赴けず、家に閉じこもっている新郎ビル・ウィーズリー (Bill Weasley) が家事を手伝う様子はなく、料理を担当し、滞在客をもてなすのは新婦フルールの役割になっている。同じことは、マグルの中産階級の典型的な家族として登場するダーズリー (Dursley) 家にも当てはまり、ダーズリー氏 (Vernon Dursley) は外で働き、ダーズリー夫人 (Petunia Dursley) は専業主婦として家の切り盛りをしている。

そのため、肯定的に描かれる成人女性に共通する資質は母性である。ウィーズリー夫人の強さは子どもたちへの愛に起因する。『死の秘宝』(806-807) で描かれるベラトリックス・レストレンジ (Bellatrix Lestrange) との闘いにおいて、それまで魔法の力においては数段も上であるように描かれていたベラトリックスにウィーズリー夫人が打ち勝つのは、娘のジニー (Ginny Weasley) を守ろうとする彼女の母性であることが読み取れる。事実ローリングは、ニューヨークのカーネギーホールで開催された「オープン・ブック・ツアー」(Open Book Tour) でのインタビューで、他の誰でもなく、ウィーズリー夫人にベラトリックスを殺させた理由を、家庭の主

婦にも才能があることを示したかったためと、ウィーズリー夫人に「母性」(maternal love) を体現させたかったからだと答えている⁴⁾。同様に、敵役であるマルフォイ (Malfoy) 家が最終的に救われるのは、『謎のプリンス』の冒頭の章や、『死の秘宝』の終盤(795) にかけての描写に顕著なように、マルフォイ夫人 (Narcissa Malfoy) の息子ドラコ (Draco Malfoy) への愛が肯定的に描かれているからであろう。

また、ダーズリー夫人が完全な敵役として排除されずに済んでいるのも、彼女の (行き過ぎではあるものの) 息子ダドリー (Dudley Dursley) への愛と、(そこには嫉妬が入り混じってはいるものの) 妹リリー (Lily Potter) への愛が確かに存在しているためである。そもそも彼女が両親を失ったハリーを引き取らなければ、ハリーはリリーと血族である家族と共にいる限り安全であるというアルバス・ダンブルドア (Albus Dumbledore) の魔法 (『不死鳥の騎士団』918-919) は効力を持たず、ハリーは十一歳になるまでヴォルデモートの魔の手から逃れ、生き延びてこれなかったわけである。彼女が妹リリーを愛し、そして同じ母親として、リリーのハリーへの愛を理解していたために、ダーズリー夫人は嫌悪していても、ハリーを育ててきたのだ。ダーズリー夫人は最終巻『死の秘宝』(52) のハリーとの別れの場面で、ハリーに何か伝えようとしている様子を見せながらも、何も言わずに去って行く。ローリングはファンからの質問に対して、ダーズリー夫人が別れ際にハリーに言おうとしたのは、「あなたが何と戦っているのかわかっているわ」ということだったと答えている。自分が嫉妬ゆえにハリーに辛く当たってしまったことを認めた上で、ハリーが無事で生き延びることをダーズリー夫人は望んでいたという⁵⁾。非常に複雑な形ではあるが、ダーズリー夫人はリリーの代わりの母親として、ハリーを守ってきたと言えるのである。

そのため、必然的に、このシリーズでは母親として描かれている女性が最も好ましい存在として扱われている。その最も顕著な例がハリーの母親リリーである。「第二次魔法大戦」で人類を救ったのは、つまり、ヴォルデモートを抹殺し得たのは、ハリーの魔法の力ではなく、ハリーを救おうとしたリリーの放った魔法であったことになっていることがすべてを集約していると言ってい

いだろう。

母親の愛がいかに大切かは、ヴォルデモートの母親、メロピー・ゴント (Merope Gaunt) の生き方にも象徴されている。トム・リドル・ジュニア (Tom Marvolo Riddle) が母親の愛を、家族愛を知っていれば、ヴォルデモートは存在しなかったかもしれない。ローリングはブルームズベリー出版社主催の「ライブ・ウェット・チャット」(Bloomsbury Live Web Chat) でのインタビューで、メロピーが生きていれば、事態は変わっていたかもしれないと述べている⁶⁾。『謎のプリンス』の第十章で明らかになるように、トム・リドル・ジュニアは父と母の愛によって生まれてきたのではなかった。トム・リドル・シニア (Tom Riddle Sr.) に一方的に恋をしたメロピーは、その魔力を用いて、彼の気持ちを無理矢理に自分に向けさせた。魔法にかけられた状態で、無意識のうちに、つまり自分の意思に反して、トム・リドル・シニアはトム・リドル・ジュニアの生物学上の父親にさせられた。はっきり言ってしまえば、トム・リドル・シニアはメロピーに「レイプ」されたに等しい。魔法が切れたとき、トム・リドル・シニアはメロピーのもとを去る。自分と母親を「棄てた」父親をトム・リドル・ジュニアは憎み、後に何のためらいもなく父親を殺すが、彼が恨むべきであったのは、父親トム・リドル・シニアよりもむしろ、母親メロピーでは

なかったのか。トム・リドル・シニアに去られた後、失恋の痛手から立ち直れなかったメロピーは、生まれてくる子どものために生きようと考えることはせず、死を選ぶ（『謎のプリンス』311）。トム・リドル・シニアが息子を棄てたというのなら、母親としてではなく、最後まで女として生きることを選択したメロピーもまた、息子を「棄てた」のだ。ヴォルデモートとハリーの対決は、母性を巡る、リリーとメロピーの対決でもある。

もちろん、ヴォルデモートが父親のトム・リドル・シニアに愛されていたら、また事態は変わっていただろう。「男は外で働き、女は家庭を守る」というステレオタイプ化された女性像が強調されてはいても、だからと言って、父親は外で働くだけで子どもたちの成長に無関係であるとローリングが考えているということではない。『炎のゴブレット』の第二十七章において、パーティ・クラウチ・ジュニア（Bartemius Crouch Jr.）がヴォルデモート一派のもとに走ったのは、家庭を顧みなかった父親、パーティ・クラウチ・シニア（Bartemius Crouch Sr.）の責任であるものとして描かれている。また、ローリングはアメリカのNBCテレビの番組『デートラインNBC』（*Dateline NBC*）のインタビューで、ウィーズリー氏を殺さなかった理由の一つとして、シリーズの中によい父親があまりにも少ないため、彼を殺すのは忍びなかったと答えている。彼女はこのとき、ウィーズリー氏はこのシリーズの唯一のよい父親と言っても過言ではないとまで述べている⁷⁾。さらに、前述のカーネギーホールでの「オープン・ブック・ツアー」のインタビューでウィーズリー氏について回答した際には、ローリングは、ロン（Ron Weasley）に片親を失わせることで、彼の明るさを損ないたくなかったと述べている。代わりに、リーマス・ルーピン（Remus Lupin）とニンファドーラ・トンクス（Nymphadora Tonks）の息子テディ（Teddy Lupin）を物語の最後で孤児にすることで、ハリーの経験を繰り返させ、今度は名付け親になったハリーが、自分の子どもたちに対しても、名付け親としても、素晴らしい父親になっていることを描きたかったのだという⁸⁾。子どもの成長にとって、父親の愛もいかに大切なものなのかをローリングは読者に伝えようとしているのである。

ローリングは前述の『デートラインNBC』のインタビューで、両親を失い、言わば世の中にたった一人で放り出された子どもの苦悩と成長がこのシリーズのテーマの一つであり、エピソードとして、十九年後を描いた目的の一つは、テディがしっかりと成長していることを読者に伝えることにあったとも答えている⁹⁾。ハリーとヴォルデモート、そしてテディ以外にも、もう一人の「選ばれし者」（“the chosen one”）、ネヴィル・ロングボトム（Neville Longbottom）も、それぞれ異なった形で、孤児としての人生を送っている¹⁰⁾。ローリングは、たとえ両親を失っても、愛情に満ちた環境があれば、立派に成長していけることを、ハリー以外にも、祖母に愛されて育ったネヴィルと、やはり祖母と、そして名付け親のハリーに愛されて育ったテディに示し、彼らと対比させることで、ヴォルデモートが悪の道へと進んでしまった原因をほのめかしたかったのだろう。

親の愛の重要性はローリングの他の作品にもはっきりと見て取れる。『カジュアル・ベイカンシー』では、親に愛されていないと感じている子どもたちがパグフォード教区会（Pagford Parish Council）の公式ウェブ・サイトに不正にアクセスし、家族しか知り得ないような親の醜聞を掲示板に書き込むことで、親たちの、ひいては町の運命を狂わせていく。父親からの暴力に耐えている少年、アンドリュー・プライス（Andrew Price）は、父親の職場での不正と盗品の所持について書き込み、父親は職場から解雇される。学校でのいじめに悩み、自分の身体を刃

物で傷付け続けていることを医者である両親に打ち明けることができずにいる少女、スクヴィンダー・ジャワンダ(Sukhvinder Jawanda) は、できのよい姉や弟と比べられ、母親に冷たく扱われることに耐え切れず、母親が父親以外の男性に密かに抱いていた愛情をウェブ上で暴露する。母親はその書き込みを読んだために生じた動揺から、議会で取り乱し、政敵に有利に審議を進められた上、停職処分となる。養父母に反抗を続ける少年、スチュワート・ウォール(Stuart Wall) は、養父の致命的な心の病を公表し、教区会議員への当選を目論む養父の夢を台無しにする。そして、同性愛者であることを告白し、両親と疎遠になってしまった娘、パトリシア・モリソン(Patricia Mollison) は、中年になった今もそのトラウマから抜け切れず、父親の六十五歳の誕生日に衝動的に父親の不倫を町の青少年少女たちに告白する。するとそれがアンドリューを通じてウェブ・サイト上に中傷として掲示され、夫を偶像視していたモリソン夫人は大打撃を受け、これまで取り繕われてきた家族の亀裂が表面化する。家庭で十分な愛情を与えられていない、あるいは与えられていないと思い込んでいる子どもたちが、親に、そして周囲の大人たちに、ひいては社会に向ける一瞬の狂気は、『ハリー・ポッター』シリーズにおけるヴォルデモート誕生の経緯を想像させる描写となっている。

2. キャリア・ウーマンの功罪

このように、母性を理想化する伝統的な価値観に従ってなのか、『ハリー・ポッター』シリーズでは、第一線で活躍している女性には、妻として、母親としての描写がほとんど存在していない。彼女たちが独身なのか、家庭があるのにそのことが描かれていないのかは明らかではないが、このシリーズに登場するいわゆるキャリア・ウーマンは、家庭を顧みない存在として否定的に描かれる傾向がある¹¹⁾。

このシリーズで政治的に最も強大な力を握ることに成功した女性はドロレス・アンブリッジ(Dolores Umbridge) である。彼女はホグワーツ魔法魔術学校では「闇の魔術に対する防衛術」(Defence Against the Dark Arts) 教授と「ホグワーツ高等尋問官」(High Inquisitor of Hogwarts) を務め、魔法省では「魔法大臣上級次官」(Senior Under Secretary to the Minister) と「マグル生まれ登録委員会委員長」(Head of the Muggle-born Registration Commission) を務めている。しかしその一方で、彼女はこのシリーズで最も心の醜い女性であると言っても過言ではない。彼女は卑劣で残忍で、目的のためなら手段を選ばない。シリーズ内では明らかにされることはないものの、作者ローリングが監修しているサイト、『ポッターモア』(Pottermore)¹²⁾ にアンブリッジの経歴に関する詳細が紹介されている¹³⁾。それによると、彼女に結婚歴はなく、子どももいない。彼女は職場、魔法省においては、典型的なオールド・ミスのお局様の存在であり、ホグワーツ魔法魔術学校においては、若い生徒たちを虐めることに加害者の快感を覚えている、文字通りの悪役である。彼女は目下の者を指導しようという気概も、母性も持ち合わせていない¹⁴⁾。

ジャーナリストとして第一線で活躍するリタ・スキーター (Rita Skeeter) も、ハリーたちの敵役として、徹底的に否定的な姿を読者にさらし続ける。彼女は不正な手段を使ってでも手柄を立てようと試み、利己心の塊で、他人、特に子どもたちの心情など意に介さない。シリーズ全体

を通して、作者ローリングへのインタビューの中でも、ローリング自身のオフィシャル・サイトにも、ローリングが監修しているファン・サイトにおいても、スキーターの家系や結婚歴などは明らかにされていないが¹⁵⁾、アンブリッジ同様、スキーターの態度にも母性のかけらも感じられない。また、絶大な魔力を持つベラトリックスは、夫がいることにはいるが、彼は作品中一度として発言せず、存在感がない上、二人の間に子どもはいない。ベラトリックスは血の繋がった従弟のシリウス・ブラック(Sirius Black)を殺し、さらには甥のドラコを目的のために利用することを厭わない。よい人の振りをするアンブリッジやスキーターとは異なり、見せかけだけであっても、他人への思いやりや母性などをベラトリックスに見出そうとすることは無駄である。

もちろん視点を変えれば、このシリーズでは女性でも高位に就けることと、女性にも男性と対等な能力があることを示しており、そこにフェミニストとしてのローリングの立場を読み取ることも可能である。ミネルバ・マクゴナガル(Minerva McGonagall)はhogwarts魔法魔術学校の副校長を務め(そして外伝『吟遊詩人ビードルの物語』(*The Tales of Beedle the Bard*)によると、シリーズ後には校長となり(xiv))、ハーマイオニ・グレンジャー(Hermione Granger)は常にハリーに的確なアドバイスを与え¹⁶⁾、アンブリッジは政治的駆け引きに明け暮れる男性官僚たちを横目に出世の階段を着実に上へ上へと昇っていき¹⁷⁾、ベラトリックスはヴォルデモートの第一のお気に入りとなる(“his last, best lieutenant”『死の秘宝』807)。また、女子生徒たちも「クイディッチ」(Quidditch)で男子生徒と対等に渡り合い、トンクスのように「不死鳥の騎士団」(The Order of the Phoenix)の一員として、また魔法省の「闇祓い」(Auror)として活躍する女性も存在している。

先ほど、第一線で活躍している女性たちが独身なのか、家庭があるのにそのことが描かれていないのかはシリーズ内では必ずしも明らかにされていないことを指摘したが、これは別の見方をすれば、結婚しているのかどうか、子どもがいるのかどうかは、女性のキャリアを語る上で特に必要のない情報である、という考え方が取られているとも言える。そう肯定的にとらえた場合、このシリーズはかなり進んだジェンダー観に基づいているかのような印象を与える。しかし、上述のように、一方で女性の實力を認めておきながら、他方でこうした女性たちが否定的に描かれているのでは、真の意味でのフェミニストの大義は達成し得ていない。妻として母親として家庭を守る女性は人間的に優れていて、男性と対等な能力を持って家庭の外で活躍している女性は欠陥を抱えているとあっては、男女平等からは程遠い¹⁸⁾。トンクスがアンブリッジやベラトリックスの二の舞を踏まずに済むのは、リリー同様、息子テディを守るためにその命を投げ出すことを恐れなかったからである。彼女はその母性を証明することで、英雄となるのだ。ただし、hogwarts魔法魔術学校が舞台となるこの作品の中心人物たちはあくまでも子どもであり、彼らの成長を描く児童文学である以上、親の愛が必要不可欠なものとして描かれているのは当然で、成人女性に第一に求められる役割は働く女性像ではなく、母親の役割となっているのは当たり前なのかもしれない。

どうやらここには、『ハリー・ポッター』シリーズ出版時の現実のイギリス国民の意識が投影されているようだ。イギリスの女性の雇用率は1980年代から高まりを見せ、その後安定を見せている。イギリスの国家統計局(Office for National Statistics)が発行した2003年10月号の『労働

市場の傾向』(*Labour Market trends*)の中に掲載された特集「イギリスの女性の地位の主要な指針」(“Key indicators of women’s position in Britain”) ¹⁹⁾の「表1」(505)によると、女性の雇用率は1990年には就労可能年齢の全女性の67パーセント、2001年には69パーセントに達している。その内訳は、5歳未満の子どもを持つ母親は1990年には41パーセント、2001年には54パーセント、5歳から10歳までの子どもを持つ母親は1990年に66パーセント、2001年に70パーセント、11歳から15歳までの子どもを持つ母親は1990年に74パーセント、2001年に75パーセント、16歳から18歳までの子どもをもつ母親は1990年に77パーセント、2001年に80パーセントとなっている。

しかし、その一方で、女性は仕事と、家庭で求められる因習的な役割、特に子育てを両立させることは容易ではないという問題を未だに抱えている。『イギリスの社会的態度——第二十回報告書』(*British Social Attitudes: The 20th Report*)の第八章「女性の場所、男性と女性にとっての雇用と家族生活」(“A woman’s place... Employment and family life for men and women”)の「表8.2」(164)と「表8.3」(164)によると、2002年度の調査では、「男は外で働き、女は家庭を守る」という考えに同意する者は17パーセントと低い一方で、「女性は子どもが就学前には家にいるべきである」という考え方には、48パーセントの回答者が賛成している。1989年度の64パーセント、1994年度の55パーセントに比べれば、確実に減ってきている一方で、未だに約半数がそうした考え方を抱いているということは、その考えが正しいか否かは別として、母親となった女性に求められる理想像はまだ多分に因習的であることが分かる。社会への女性の進出を拒む偏見は減っている一方で、家庭における男女の役割分担の理想像が女性に母親であることを強く望んでいるのが現状なのである。ローリング自身は意図していなかったかもしれないが、『ハリー・ポッター』シリーズの女性描写は、確かにこうした当時の世論を反映していると言えるだろう。

3. 十代の少女たちの未来

ここまで、成人した女性に焦点を絞ってきたが、次に、最終巻のエピローグで描かれる、十代の少女たちの未来には何が読み取れるのか、ハーマイオニを例にとって考察してみよう。hogwarts魔法魔術学校では常に学年トップの成績を取め、『死の秘宝』で、ハリーとロンとともに逃走中、自分が女性だから食事を用意し、ハリーとロンの世話をするのが当然だというのはおかしい、と声高に異議を唱えたハーマイオニ(326)の未来に、エピローグを読むまで、フェミニストの読者は高い期待を抱いていたかもしれない。しかし、「第二次魔法大戦」の十九年後を描いたエピローグで強調されるハーマイオニの側面もやはり母性である。十九年後、ジニー同様、家庭を持ち、母親となっているハーマイオニは、キングス・クロスのプラットフォームで、ハリーやロンの一歩後ろに下がって、夫と子どもたちの姿を温かく見守っている。最終巻が出版された後、作者ローリングは前述のブルームズベリー・ライブ・ウェブ・チャットでのインタビューで、キャリア・ウーマンとして活躍するハーマイオニの後日談を紹介しているが²⁰⁾、インタビューで語られた内容というのは、出版物としてのシリーズの読者全員が必ずしも共有するものではない以上、あくまでも作品の外伝に過ぎず、シリーズ内で明らかになることとは違う次元でとらえなければならない。全七巻の小説のみを「正典」と見なせば、hogwarts魔法魔術学校卒業後、ハーマイオニが仕事に就いたのか否かは明らかではなく、読者に知らされるハーマイオニのその後とは、よき

妻、よき母親となった彼女の姿に限られているのである。ヘイルマンとドナルドソン(Elizabeth E. Heilman and Trevor Donaldson 145)は、ハーマイオニが伴侶としてロンを選んだことに対し、もともとハリーとロンの従属的役割に満足していたハーマイオニの、トリオの中での依存的なアイデンティティがより強固なものになったことを示している、と手厳しい。

以上のように、このシリーズの女性の描かれ方には、ヴィクトリア朝の「家庭の天使」にまでさかのぼることができる伝統的、保守的な女性観が散見される。少なくとも、例えば、仕事か結婚か、産むか産まないかという選択肢の中で、正しい選択をしたかのように肯定的に描かれている成人女性は、結婚し、子どもを産み、家庭を守り、母性に富んだ女性である。その点でこのシリーズは保守的と言えるだろう。

しかし、先程は、外伝として考察の対象から外したものの、ここで、ローリングがインタビューなどで明らかにした十代の少女たちの未来に作者の主張を読み取ることが許されると仮定し、考察を進めてみると、どうやら作者から女性たちの未来への期待は高いようだ。外伝で明らかになることを、作品解釈に有効と認めれば、例えばハーマイオニは、ヴォルデモートとの死闘の後、hogwarts魔法魔術学校に復学し、第七学年の6月に受ける「めちゃくちゃ疲れる魔法テスト」(Nastily Exhausting Wizarding Tests、通称「イモリ」(N.E.W.T.s))という高等教育修了試験を受験し、魔法省に入り、「魔法生物規制管理部」(Department for the Regulation and Control of Magical Creatures)でハウス・エルフの地位向上に尽力したという。そしてその後「魔法法執行部」(Department of Magical Law Enforcement)に異動し、「純血」支持法(pro-pureblood laws)の撲滅を推進しているという²¹⁾。また、ジニーはhogwarts魔法魔術学校卒業後、「ホリヘッド・ハーピーズ」(Holyhead Harpies)という魔女(女性)だけのクイディッチのプロ・チームの選手として活躍していたが、ハリーとの結婚を機に家庭に入るために、チームを引退したという。代わりに『日刊預言者新聞』(*Daily Prophet*)のクイディッチ担当の上級特派員としてスポーツ・コラムに記事を執筆しながら、妻として、母親として、家庭を守っているという²²⁾。ルナ・ラヴグッド(Luna Lovegood)は魔法生物学者となり、多くの新種の動物を発見する一方で、hogwarts魔法魔術学校の教科書として用いられている『幻の動物とその生息地』(*Fantastic Beasts and Where to Find Them*)の著者の孫で、やはり魔法生物学者であるロルフ・スキヤマンダー(Rolf Scamander)と結婚し、双子の男児ローカン(Lorcan)とライサンダー(Lysander)をもうけたという²³⁾。さらに、もう一人の「選ばれし者」、ネヴィル・ロングボトム(Leaky Cauldron)の妻となったハンナ・アボット(Hannah Abbott)はバブ「漏れ鍋」(Leaky Cauldron)をトム爺さん(Tom)から引き継いで、切り盛りしているという²⁴⁾。

このように、シリーズ内ではまだ十代であった少女たちは、成人後、仕事と家庭を両立させている。いわゆるキャリア・ウーマンとして出世の階段を上がっていく一方で、子どもたちを立派に育て上げている。ハーマイオニもジニーも希望の職種に就くだけでなく、それぞれの初恋の相手と結ばれ、ウィーズリー夫人の世代とは異なった、新しい理想の女性像を提示している。作者ローリングの想像の世界では、十代の少女たちは、シリーズ内の成人女性たちには果たせなかった人生を歩んでいくことになっているのである。

ただし、残念なことに、こうした後日談は、あくまでも外伝でしかなく、「ポッターマニア」(Pottermania)と呼ばれる、いわゆる熱狂的なファンでもない限り、正典を読んだだけでは、

少女たちへの作者の期待は伝わってこない。シリーズのみに視点を限れば、やはりここに描かれた女性像は、まだまだ伝統的で保守的なものでしかないと言わざるを得ないだろう。ファンタジー小説『ハリー・ポッター』の仮想の世界、魔法界にも、性差による社会的役割分担への人々の期待を垣間見ることができるようになっており、読者は現実世界の差別意識を思い起こさせられる。

結び

以上、『ハリー・ポッター』シリーズに読み取ることのできる、現代のイギリス社会が抱える諸問題と、それらに対する作者ローリングの態度、回答について、三つの論文にわたって考察してきたが、『ハリー・ポッター』は、女性に関しては伝統的、保守的な側面が強く、人種に関しては、その描写に大英帝国時代の遺産を垣間見ることができ、階級に関しては、多分に自由主義、個人主義ではあるものの、平等主義的な社会主義にまでは至っていないことがうかがえる。また、三つの論文の考察から、このシリーズは、未だにイギリスの過去を引きずっている一方で、子どもたちの未来に変化への希望を託している、まさに現代社会を写し取った児童文学作品と結論付けて問題はないと思われる。

ローリングは、ベストセラー『ハリー・ポッター』シリーズ完結後、より政治色の濃い「大人向けの小説」、『カジュアル・ベイカンシー』を出版したり、ペンネームを男性名に変え、全くの別人としてミステリー小説を出版したりして²⁵⁾、ジャンルの異なった小説を次々と出版し続けている。しかし、それぞれ作品のジャンルは異なるものの、現代のイギリス社会が抱えるジェンダー、階級、人種などに関する諸問題に対する作者ローリングの明白な態度、主張が大きくぶれている様子はない。ローリングはどのようなジャンルの作品を発表したとしても、今後も彼女自身の生きる現代イギリスを冷静な目で観察し、様々な切り口でその姿を作品に写し取り、彼女の本国であるイギリス国内外の読者たちを楽しませ、そして考え続けさせることだろう。筆者も、イギリス文学を研究する者として、また、イギリスから遠く離れてはいるが、同時代を生きる一読者として、今後もローリングの動向を見守っていきたいと考えている。

注

- 1) 本論文で『ハリー・ポッター』シリーズ全七巻から引用する際には、タイトルの共通部分の「ハリー・ポッター」は省略した上で、翻訳本と映画で使用され、一般化している日本語タイトル、『賢者の石』(*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 1997)、『秘密の部屋』(*Harry Potter and the Chamber of Secrets*, 1998)、『アズカバンの囚人』(*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, 1999)、『炎のゴブレット』(*Harry Potter and the Goblet of Fire*, 2000)、『不死鳥の騎士団』(*Harry Potter and the Order of the Phoenix*, 2003)、『謎のプリンス』(*Harry Potter and the Half-Blood Prince*, 2005)、『死の秘宝』(*Harry Potter and the Deathly Hallows*, 2007) を用い、その頁数を示すこととする。
- 2) 『カジュアル・ベイカンシー——突然の空席』(*The Casual Vacancy*, 2012) の本カバーの前袖には、宣伝文句として「ある小さな町についての大きな物語である『カジュアル・ベイカンシー——突然の空席』はJ・K・ローリングの初めての大人向けの小説。他に類を見ないストーリー・テラーによる作品」(強調は筆者によるもの)と記されている。
- 3) 例えば、『炎のゴブレット』(67-70)や『謎のプリンス』(103-104)でウィーズリー夫人は魔法を使って家事を行っている。また、『不死鳥の騎士団』でニンファドーラ・トンクス(Nymphadora Tonks)は、自分は家事用の魔法(“these householdy sort of spells,” 64)が不得意だと言っていることから、家事をスムーズに行う魔法があり、魔法使いたちはそれを学ぶことができることが分かる。

- 4) 2007年10月19日にニューヨーク、カーネギーホールで開催された「オープン・ブック・ツアー」でのインタビュー。現在このインタビューの SCRIPT はウェブ・サイト『漏れ鍋』(*The Leaky Cauldron*) (<http://www.the-leaky-cauldron.org/2007/10/20/j-k-rowling-at-carnegie-hall-reveals-dumbledore-is-gay-neville-marries-hannah-abbott-and-scores-more>) で読むことができる。
- 5) 2007年7月30日に行われたブルームズベリー出版社主催のライブ・ウェブ・チャット(Bloomsbury Live Web Chat) と注4のカーネギーホールでのインタビュー。現在ブルームズベリー・ライブ・ウェブ・チャットの SCRIPT はウェブ・サイト『漏れ鍋』(<http://www.the-leaky-cauldron.org/2007/7/30/j-k-rowling-web-chat-transcript>) で読むことができる。
- 6) 注5のブルームズベリー・ライブ・ウェブ・チャット。
- 7) 2007年7月29日放送のアメリカのNBCテレビの番組『デートラインNBC』のインタビュー「ハリー・ポッター——最終章」(“Harry Potter: The final chapter”)。現在このインタビューの SCRIPT はNBCのホームページ(<http://www.nbcnews.com/id/20001720/>) で読むことができる。
- 8) 注4のカーネギーホールでのインタビュー。
- 9) 注7参照。
- 10) ネヴィルの両親はベラトリックスらが拷問時に放った呪文で心神喪失の状態になり、聖マンガス魔法疾患傷害病院(St. Mungo's Hospital for Magical Maladies and Injuries) に入院している(『炎のゴブレット』の第三十章、『不死鳥の騎士団』の第二十三章)ため、ネヴィルは厳密な意味では孤児ではないが、彼の置かれた状況はハリーと対になっている。事実ネヴィルは、最終巻『死の秘宝』の第三十六章において、ヴォルデモートの最後の「分霊箱」(Horcrux)である蛇のナギニ(Nagini)を、真のグリフィンボール生のみが「組み分け帽」(the Sorting Hat) から取り出せると言われている「グリフィンボールの剣」(Sword of Gryffindor) で倒すという重要な役割を果たしている。
- 11) また、興味深いことに、このシリーズの主要登場人物の中には、敢えて未婚のままでも子どもを産み、自分の意志でシングルマザーとなっている女性は存在していない。
- 12) 『ポッターモア』は当初、登録者のみが読むことのできるサイトであったが、2015年9月にデザインが一新され、誰でもアクセスできるようになった。ただし、リニューアルにより、排除された情報もある。
- 13) 詳しくは『ポッターモア』のアンブリッジの説明 (<https://www.pottermore.com/writing-by-jk-rowling/dolores-umbridge>) を参照されたい。
- 14) こうした彼女の不快さを視覚に訴えて象徴しようという目的なのか、それとも架空小説であるために単に滑稽化することが目的なのかは定かではないが、彼女の外見も実に不快なものに設定されている。このシリーズでは、ハリーの敵役の女性は皆、女性としての魅力に欠ける不快な外見を与えられているが、特に『不死鳥の騎士団』から登場するアンブリッジは際立って醜い外見になっている。彼女は著しく身長が低く(234-235)、「膨れ上がった目」(295)、「ガマガエルのように広がった口」(296)、「尖った歯」(235)などの醜い容姿から、生徒たちに「ガマガエル」(toad) というあだ名をつけられている。彼女の年齢は明らかではないが、ホグワーツ魔法魔術学校卒業後、魔法省で高位に就いていることから、四十代から五十代と思われる。にもかかわらず、年甲斐もなく子どものようなかわいらしいしゃべり方をし(235, 273)、服装は少女趣味で、「ふわふわのピンクのカーデガン」(235, 265)や「花柄のローブ」(294)をはおり、頭には「黒いビロードの蝶結び」(265)をつけ、ずんぐりした短い指にはたくさんの指輪をはめている(297, 305)。
- 15) 『ポッターモア』のスキーターの紹介欄 (<https://www.pottermore.com/explore-the-story/rita-skeeter>) では、彼女は1951年生まれで、四十三歳の設定になっている。
- 16) ハーマイオニが立ち上げる「屋敷しもべ妖精福祉振興協会」(the Society for the Promotion of Elfish Welfare、通称S.P.E.W.)の名称が、ヴィクトリア朝時代に、バーバラ・リー・スミス(Barbara Leigh Smith)、アデレイド・プロクター(Adelaide Proctor)、ジェシー・ブシェレット(Jessie Boucherett)らによって、女性に仕事を斡旋することを目的に設立された「女性雇用促進協会」(Society for the Promotion of the Employment of Women、正式名称Society for Promoting the Employment of Women)の頭文字と同じである点は、ハーマイオニをフェミニズム批評で読み解こうとした場合、示唆的である。
- 17) ただし、上述の『ポッターモア』のアンブリッジの頁には、彼女は野心の塊で、他人の手柄を横取りして出世したと紹介されている。
- 18) 例えばマクゴナガルも、生徒たちへの愛情に満ち溢れている一方で、規則にとらわれ、甘えを許

さない性格のために、愛情を優しさで表現することが苦手で、どこか近付き難い雰囲気醸し出している。シリーズ内では明らかにされることはないものの、上述のサイト『ポッターモア』で紹介されているマクゴナガルの経歴 (<https://www.pottermore.com/writing-by-jk-rowling/professor-mcgonagall>) によると、マクゴナガルは子どもには恵まれなかったが、夫アーカート (Elphinstone Urquart) に先立たれた未亡人であることになっており、ローリングは、彼女が「混じり気のない嫌悪を感じる登場人物の一人」(注13の『ポッターモア』のアンブリッジの説明) と言い切るアンブリッジとは異なり、マクゴナガルがいわゆる否定的なオールド・ミス像に陥らないように取り計らっているようだが、結婚後も旧姓を名乗り続けることを選択した彼女には、フェミニストとしてのたくましさの方が先行し、彼女の姿に理想の母親像は重ならないように思われる。

- 19) ヒベットとミーガー (Angelika Hibbett and Nigel Meager) によるこの特集記事 (keyindicatorsofwomen_lmtoct_tcm77-160239.pdf) は国家統計局のホームページで閲覧することができる。
- 20) 注5参照。また、改訂前の『ポッターモア』に2014年7月8日にアップデートされた『日刊預言者新聞』(*Daily Prophet*) のスキーターのゴシップ記事でも、三十四歳になったハーマイオニの魔法省での活躍が描かれていた (<http://www.pottermore.com/en/daily-prophet/qwc2014/2014-07-08/dumbledores-army-reunites>、閲覧日2015年1月18日)。
- 21) 注5のブルームズベリー・ライブ・ウェブ・チャットと、2007年12月17日に放送されたウェブ・サイト『漏れ鍋』の「ポッター・キャスト」(*PotterCast*) でのインタビュー。現在「ポッター・キャスト」のインタビューはウェブ・サイト『アクシオ・クォート!』(*Accio Quote!*) (<http://www.accioquote.org/articles/2007/1217-pottercast-anelli.html>) で読むことができる。また、注20で紹介した『日刊預言者新聞』のゴシップ記事には、ハーマイオニが「魔法法執行部副部長」(Deputy Head of the Department of Magical Law Enforcement) にまで昇進したと記されていた。
- 22) 注5のブルームズベリー・ライブ・ウェブ・チャット。また、改訂前の『ポッターモア』では、2014年から『日刊預言者新聞』が読めるようになり、クイディッチ担当の上級特派員となっているジニーが、バタゴニア砂漠から定期的に記事を送ってきている設定になっていた。スキーターは注20で紹介したゴシップ記事の中で、夫と子どもをロンドンに残し、仕事のために大会の行われている現地に長期出張しているジニーのことを、妻として、母親としてはいかなものかと批判していた。
- 23) 2007年7月26日放送のアメリカのNBCテレビの番組『トゥデイ』(*Today*) のインタビュー「『ハリー・ポッター』は終わり? — ローリング、その後の展開を語る」(“Finished ‘Potter’?: Rowling tells what happens next”)、注5のブルームズベリー・ライブ・ウェブ・チャット、2007年12月30日放送のイギリスのITV 1 テレビの番組『人生のある一年』(*A Year in the Life*) より。現在NBCテレビのインタビューの SCRIPT はNBCのホームページ (http://www.today.com/id/19959323/ns/today-wild_about_harry/t/finished-potter-rowling-tells-what-happens-next/#.UhmaYr6CiUI) で、ITVテレビのビデオはウェブ・サイト『ユーチューブ』(*YouTube*) などで見ることができる。また、このITVテレビの番組でローリングが描いたハリーの子どもたちの世代の家系図は様々なウェブ・サイトで確認できる。
- 24) 注4のカーネギーホールでのインタビュー。また、注20で紹介した『日刊預言者新聞』のゴシップ記事によると、ハンナは hogwarts 魔法魔術学校の寮母の職に応募したという。
- 25) ローリングは2013年4月にロバート・ガルブレイス (Robert Galbraith) という男性名で『カックウの呼び声——私立探偵コーモラン・ストライク』(*The Cuckoo's Calling*) というミステリー小説をリトル・ブラウン社から出版した。出版社のウェブ・サイト (<http://www.littlebrown.com/authorsapril.html>) には、当初、「ロバート・ガルブレイスは英国軍警察 (Royal Military Police) で数年勤務した後、同警察の特殊捜査隊 (Special Investigative Branch) に所属し、2003年に軍から退役して以降、民間の警備会社に勤めている」と紹介されていた。しかし、2013年7月に『サンデー・タイムズ』(*The Sunday Times*) 紙が、ガルブレイスはローリングのペンネームであることを断定すると、ローリングもすぐにそれを認め、その後出版社のウェブ・サイトには、「ガルブレイスはローリングの偽名である」という一文が付け加えられた。このミステリー小説はその後シリーズ化され、2014年6月には第二作『カイコの紡ぐ嘘——私立探偵コーモラン・ストライク』(*The Silkworm*) が、2015年10月には第三作 *Career of Evil* が出版されている。

引用文献

- Crompton, Rosemary, Michaela Brockmann, and Richard D. Wiggins. "A woman's place... Employment and family life for men and women." *British Social Attitudes: The 20th Report: Continuity and change over two decades*. Ed. Alison Park, et al. London: Sage, 2003. 161-187.
- "Finished 'Potter'? Rowling tells what happens next." Interview by Jen Brown. *Today* 26 July 2007. NBC News. Web. 25 Aug. 2013.
- Galbraith, Robert. *Career of Evil*. New York: Mulholland Books, 2015.
- . *The Cuckoo's Calling*. London: Sphere, 2013.
- . *The Silkworm*. New York: Mulholland Books, 2014.
- "Harry Potter: The final chapter." Interview by Meredith Vieira. *Dateline NBC* 30 July 2007. NBC News. Web. 22 Aug. 2013.
- Heilman, Elizabeth E., and Trevor Donaldson. "From Sexist to (sort-of) Feminist: Representations of Gender in the Harry Potter Series." *Critical Perspectives on Harry Potter*. 2nd edition. Ed. Elizabeth E. Heilman. New York: Routledge, 2009. 139-161.
- Hibbett, Angelika, and Nigel Meager. "Special feature: Key indicators of women's position in Britain." *Labour Market trends* 111.10 (October 2003): 503-511. Office for National Statistics. Web. 24 Feb. 2012.
- "J. K. Rowling at Carnegie Hall Reveals Dumbledore is Gay; Neville Marries Hannah Abbott, and Much More." *The Leaky Cauldron*. 20 Oct. 2007. Web. 10 Jan. 2012.
- "J. K. Rowling Web Chat Transcript." *The Leaky Cauldron*. 30 July 2007. Web. 10 Jan. 2012.
- "PotterCast Interviews J. K. Rowling, part one." Interview by Melissa Anelli, John Noe, and Sue Upton. *PotterCast* 17 Dec. 2007. *Accio Quote!* Web. 25 Aug. 2013.
- "Robert Galbraith." *Authors*. LittleBrown.com. Web. 25 Aug. 2013.
- Rowling, J. K. *The Casual Vacancy*. London: Little, Brown, 2012.
- . "Dolores Umbridge." *Pottermore*. Web. 21 Dec. 2015.
- . "Dumbledore's Army Reunites at Quidditch World Cup Final." *Pottermore*. 8 July 2014. Web. 18 Jan. 2015.
- . *Fantastic Beasts and Where to Find Them*. 2001. London: Bloomsbury, 2009.
- . *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. 1998. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. 2007. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. 2000. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. 2005. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. 2003. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. 1997. London: Bloomsbury, 2010.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. 1999. London: Bloomsbury, 2010.
- . "Professor McGonagall." *Pottermore*. Web. 21 Dec. 2015.
- . "Rita Skeeter." *Pottermore*. Web. 21 Dec. 2015.
- . *The Tales of Beedle the Bard*. London: Bloomsbury, 2008.
- 坂田薫子「ハリー・ポッターのイギリス(1)——『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における人種問題」(『英米文学研究(日本女子大学)』第49号、2014年、125～142頁)
- - - 「ハリー・ポッターのイギリス(2)——『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における階級問題と政治」(『英米文学研究(日本女子大学)』第50号、2015年、71～89頁)